

# 過程を奪われる社会 —名前のない生きづらさに〈応答〉する場の実践から—

A Society Deprived of Process

: from the Practice of the Places that "Respond" to the Nameless Difficulty of Living

学籍番号 47-196728

氏名 木村 佳菜子 (Kimura, Kanako)

指導教員 清水 亮 准教授

## I. 問題の所在

我々は日々生活する中でしばしば生きづらさを経験する。生きづらさの一部は社会環境の改善を求める運動を通して、社会問題化されてきた。日本においては、公害をめぐる住民運動や、1970, 80年代の当事者運動、2000年代後半の反貧困活動等の集合的アイデンティティを足場にした運動があり、それぞれ成果を上げてきた。

一方、集約しづらく分かりづらい生きづらさはこうした社会問題化の回路に乗らずに取り残されてきた。そのような生きづらさは、1990年代頃からの個人化の進行に伴い、個人的に処理すべきものと見なされるようになった。そして不適応を起こした人々は、専門家らによって精神障害や発達障害、パーソナリティ障害、ひきこもり、ニートといった名前を付与されていった。

そうした状況の中、なお既存の名前に還元できない「名前のない生きづらさ」が聞かれ始めた。例えば、過重労働やいじめ被害の経験がないにもかかわらず働くことができなくなる、障害の診断は受けていないものの世の中の前提に乗っかれなさを覚え、自己否定感や社会生活への絶望感を抱く等だ。名前がないとはいえ切実さに劣るとい

とはなく、自らの生きづらさの正体が把握できず対処できない、周囲や社会に理解・許容されない、福祉制度の対象外になる等、名前がないゆえの困難が上乘せされることもある。

しかし、「名前のない生きづらさ」に名前を新たに付与しようとしても、人々をカテゴライズすることには必然的に漏れ落ちが伴う。また、名前の付与がマイノリティの括り出しにとどまれば、生きづらさを生んできた社会構造を維持することになる。そこで本研究では、生きづらさに名前を求めないことで、別の視座を引き出すことを試みたい。

## 研究目的

本研究の目的は、①生きづらさを個人化せず、名前のないままに受け取り応じようとする実践を解明すること、②そのことを通して新たな視座を引き出し、従来の対応ひいては社会のあり方の問題を指摘することである。本研究は「いかに支援するか」というよりは、「事例がこの社会の何を照射しているか」に重心を置き議論していく。

## 研究方法

場の変遷や認識法則を明らかにするため、ヒアリング調査や参与観察、文献調査を採

用した。また、事例の多数性をのぞみにくいこと、母集団の設定が難しいことから、無作為でなく判断によるサンプリングを行い、シュール大学(東京)、YC スタジオ(松江)、なるにわ(大阪)、R さんの開いている場(京都)を事例とした。

以下、各事例を、その概要とともに**研究目的①**と対応する形で記述する。

## II. シュール大学の事例

シュール大学(現・零穿大学)は、1999年にNPO法人東京シュールの1部門として始まったオルタナティブ大学である。文部科学省認定の大学ではなく、入学試験やカリキュラム、単位システム、修了年限も存在しない。シュール大学には現在の社会に生きづらさを覚える人が多く在籍するが、学生らによって実践されているのは「生きづらさへの対処」ではなく、「自分から始まる」学びと生き方を創ることである。それだけでなく、シュール大学という場そのものも学生ら主体で創られ運営されている。

学生らの多くは、既存の学校や労働の場で「自分が自分であれない」経験をしてきている。そうした状況から、シュール大学での活動を通して自分と世界・社会との関係性の絡まりを解明し、自分を起点に新たな関係を再構築している。その過程は「世界を自分に取り戻す」と表現されている。

「不登校」「ひきこもり」といった名前との付き合い方としては、制度の利用や資金集め、広報等の際に、名前を部分的に引き受けることはあるが、「自分たちのあり方を変えなくても使えるものだけ使う」「無理なら使わない」という形で、原点からぶれないように折り合いをつけている。

## III. YC スタジオの事例

YC スタジオは、第一義として「居場所」を掲げるとともに、やってみたいことを試せる工房としても開かれている。

不登校経験者が中心となって設立した場であるが、やがて家庭に居場所のない青少年や、精神障害当事者、自傷傾向のある人、シングルマザー等、多種多様な人々がやって来るようになった。YC スタジオは、そうした人々の困難やニーズに応じていく形で、資源を調達し、活動を展開してきた。

YC スタジオには既存の制度や枠組みからこぼれ落ちた人も多く来ることから、当事者を枠組みに合わせるのではなく、当事者主体のあり方が追求されてきた。その一つとして、食や農、アートを中心にソーシャルファーム的なあり方が試みられてきた。

理事長のEさんは、現場で様々な困難状況に置かれた当事者と出会い、「放っておけない」という思いを抱いて、当事者を場で受け止めるだけでなく機関や制度へも働きかけてきた。そのようにして人権侵害や差別と闘ってきたEさんは、「生きづらさ」という言葉の普及に伴い社会の側の問題が有耶無耶にされることを危惧していた。

## IV. なるにわの事例

なるにわは、NPO法人フォロが運営する「『なにものか』でなくともよい場所」であり、18歳以上であれば属性に関係なく参加することができる。主な活動として、週1回のサロン・夕食づくりや、月1回の「生きづらさからの当事者研究会(づら研)」等があり、場の参加者による企画も度々立ち上がってきた。

なるにわは、社会との関連において生き

づらさを捉え考えていく場として生まれ、生きづらさの個人化への問題意識は当初から強く存在した。また、人が理性的で自立的であれないような「しんどい」状態にある時、親密圏のみで抱えてしまう傾向があるが、そのような状態を受け止められる場としてもあり続けてきた。

なるにわでは、生きづらさへの名づけが力関係や「どうにかしようとする」方向性を帯びることから、生きづらさを名前のないまま受け止めることにこだわってきた。また、支援者一被支援者の関係にならないように参加費のあり方等にも工夫を凝らし、参加者とともに場を創ってきた。

さらに、なるにわは、社会に了解されやすいストーリーで場を語らないという方針を採っている。ストーリーからこぼれ落ちるものを捨象することが参加者を抑圧しうること、ストーリーの提示が集約しづらい生きづらさや一人一人の固有な部分、揺れを受け止めるという場の位置づけと合わないこと等がその理由だ。なるにわは、人々の生きづらさを受け止めるだけでなく、場自体が苦しみを再生産しないようにも注意を払っていた。

## V. Rさんの開いている場の事例

Rさんは、II～IVの事例とは異なり、生きづらさを抱える人の参加する場を開いているというより、Rさん自身が生きづらさと向き合いそこから抜け出していくために、自ら場を創り参加してきた。

Rさんは、中学生頃からいじめ被害をきっかけにフラッシュバックに苛まれていたが、それが緩和していった後も名前のない生きづらさを感じていた。やがて独自に回

復を探究する中で、必要なのは個人への心理学的なアプローチではなく、適切な場や媒体の設定だと思うようになった。

現在Rさんが仲間とともに開いている場は、畑での自給を行う「京都のらびと学舎」や、既存の学問分野や方法にとらわれず自身の関心を探究する「私の探究・研究相談室」、参加者が各自で好きな本を読み好きな時に発表する「DIY読書会」等、複数ある。Rさんにとっての生きづらい状態とは、自らのリアリティが更新されていかないことであり、そうした状況を脱するための媒体が自給や場づくりなのだ。

Rさんは自給や場づくりをするにあたって、既存の枠組みやイメージ—例えば農「業」や学問の型—にとらわれない形で、自分たちに合うように方法を調整してきた。そのような、自らの実感や環境からのフィードバックを手がかりに試行錯誤していく過程を重んじており、そのことをもって自分と世界との間の「応答関係」が取り戻されていくと考えている。

## VI. 考察

VIでは各事例の実践を通して新たに見出された視座から考察する（研究目的②）。

II～Vで見てきたように、事例はそれぞれに立ち位置やあり方が異なる。しかし、いずれの事例においても、場の参加者が自ら試行錯誤している様子、およびその過程を通して場が醸成され、参加者自身にも変化が起こる様子が見られた。場と参加者との間に起きるこうした相互作用・相互変容を、Rさんの言葉を借りて〈応答〉と呼ぶ。参加者は、自ら試行錯誤する過程をもって場の主体たりえていると考えられる。また、過程

を重ねる中で、長い時間と揺れを伴いながらも、自らの生活や人生についても主体となっていくことがある。

参加者の多くは、過去に既存の枠組み—労働や医療・福祉、学問等の制度やサービス、体系等—が合わずに苦しんだり、それらでは生きづらさが軽減されなかつたりした経験をしていた。現代では、様々な生きづらさ・ニーズに対処すべく多様な選択肢が世に供給され、それに伴い個人は、自らの困難を解消するために選択肢から自分に合うものを「選ぶ」主体となってきた。しかし、選択肢が多様化しても生きづらさを抱える人は現れ続けている。選択肢をさらに増やすことや選びやすくすることで解消される生きづらさもあるが、自ら試行錯誤し創っていく過程を重んじてきた事例の様子からは、選択肢の拡充では対応できない生きづらさの存在がうかがえる。どれほど多様な選択肢が用意されたとしても、外部により設けられ、かつ〈応答〉のない枠組みに乗る形では、人は「選ぶ」主体にはなれても「創る」主体にはなることができず、創っていく過程を経験することもできない。そうした、過程がないことによる生きづらさも人々の中には存在しているのだ。

同様の問題は、生きづらさを抱える人に名前をつけ対処することによっても生じている。Iで述べたように、現在の社会に不適應を起こした人々は、専門家らによって発達障害やパーソナリティ障害、ひきこもり、ニート等と名づけられ、「治療」「指導」「支援」の対象とされていった。この時、生きづらさを抱える人々は客体の立場に置かれ、自らの生きづらさをどう問題定義し、いかにアプローチするかを試行錯誤していく過

程を奪われている。

選択肢の多様化は一見社会の自由度を上げるように思えるが、実際には、多様なものの中から「選ぶ」ことに適応的な人でなければその恩恵を受けられない。さらに、個人化社会においては、選択肢の多様化だけでは、選ぶこと責任、選べないことによる不利益の責任を個人に帰する構造へ加担することになる。無論、多様な選択肢があること自体が問題なのではないが、選ばされることの生きづらさ、過程がないことの生きづらさには選択肢の上塗りでは対応できない。

本研究では、「名前のない生きづらさ」への着目、および、生きづらさを名前のないままに受け止め応じてきた場の実践から、〈応答〉と過程という視点が導かれた。そして、**多様な選択肢を用意し提供する生きづらさ対処のあり方が、人々から過程を奪う**ことを指摘した。「名前のない生きづらさ」を従来の対処の限界を示すものと捉えること、社会環境が人々に絶えず〈応答〉し続けるようなあり方を探求していくことが必要なのではないか。

#### 【参考文献】

- Conrad, P., J. W. Schneider & J. R. Gusfield, 1992, *Deviance and Medicalization: From Badness to Sickness: Expanded Edition*, Temple University Press. (進藤雄三・杉田聡・近藤正英訳, 2003, 『逸脱と医療化—悪から病いへ』ミネルヴァ書房.)
- Kido, Rie, 2018, *Engaging the angst of unemployed youth in post-industrial Japan: a narrative self-help approach*, University of Adelaide, School of Social Sciences, Thesis (Ph.D.).
- 野田彩花・山下耕平, 2017, 『名前のない生きづらさ』子どもの風出版会。